

王 昌 齡 研 究

—「芙蓉楼送辛渐」を中心に—

梶 原 真 純 著
松 尾 善 弘 監修

— 目 次 —

はじめに

第一章 詩歌の天子王江寧

第一節 その生涯

第二節 題材と内容

第二章 「芙蓉楼送辛渐」の検証

第一節 近体詩の規則と平仄

第二節 「芙蓉楼送辛渐」の詩形式

第三章 初句解釈の異同

第一節 「人間」を主体とする説

【出自注釈書】

【文法構造と論拠—唐代の旅—】

第二節 「夜」を主体とする説

【出自注釈書】

【文法構造と論拠—時間詞+動詞—】

第三節 「寒雨」を主体とする説

【出自注釈書】

【文法構造と論拠—連動式—】

第四節 「江」を主体とする説

【出自注釈書】

【文法構造と論拠—兼語式—】

結 論 【李白詩との比較による検証】

参考文献

はじめに

私がこの「芙蓉楼送辛漸」の詩を卒論の題材に選ぶと思ったのは、三年の時の授業での課題がきっかけだった。それは漢詩を一つ選んで、平仄の検証と訳をするもので、そのときは特に深く考えず、読んでみてイメージが良かったものを何気なく選んだ。恥ずかしいことに、私はこのときまで“王昌齡”なる人物を知らなかった。そして「芙蓉楼送辛漸」の通釈にも疑問を持たなかった。しかし、この詩には訳が幾通りもあることを知り、自分がその中の一つを選んだ理由を問われて初めて興味深く思えた。なぜ人によってこうも解釈が異なるのか。作者の意図にどの説が限りなく近いのか。それを導き出すためには様々な角度からの論拠を必要とする。実際、諸注釈書を見て思ったのは、論拠が薄弱だということである。その説を採った理由を書いていなかったり、先人がこう言っているのでそう訳すとしていたりするものが多い。また、当時の作者の状況を考えて、それを論拠としているものもあった。しかし、想像だけでは空論にしかならず、説得力に欠ける。従って私のやるべきことは、各説で曖昧な部分を明らかにすること。そして詩を鑑賞するのではなく、敢えて文法的に読み砕くことだ。この方法で解釈している例はほとんどない。詩は文字数が制限されているという特殊なものだから、普段の文章で使う文法は当てはまらないと考える人もいるだろう。しかし、詩を作るのに全く文法が無視されているとも考えにくい。なぜなら作者本人だけが分かっている、他人にその詩の意味が通じなければ意味がないからだ。しかも言葉というものは音や語の意味は変化しやすいが、文法は変化しにくい。その点からしても詩を語釈・状況の二点からの解釈に加えて、文法も考慮すべきであると考え。よって、私はこの「芙蓉楼送辛漸」を当時の時代の状況と語釈に加え、文法の観点を中心に解釈してみようと思う。

平成13年1月

第一章 詩歌の天子王江寧

第一節 その生涯

盛唐の詩人王昌齡（698～757）、字は少伯。京兆（今の陝西省西安市）の人。一説には江寧（今の江蘇省南京市）の人とも言われる。本籍は太原（山西省太原市）。開元15年（727年）、進士に及第して汜水県（河南省）の尉につく。『河嶽英靈集』はこの年を盛唐の初年と定め、王昌齡の活動と創作の主なものはこの盛唐年間としている。進士になる前、王昌齡は「長い間貧しくて社会的地位が低かった」（「上李侍郎書」）。俗世間を離れて陝西省藍田県、灞水の丘の西、石門谷で静かに半農半学の暮らしをしていたが、後に石門谷を出て官吏になることを求め、当政に謁見を請い抜擢を願った。このような処世術は李白と大いに同調する。また博学宏辞科の試験に合格し、校書郎に転じた。生涯の官吏の道は幸運が巡ってきたわけではなく、反対に不遇な行く末が

ここより始まった。こまごました礼儀作法など眼中にない奔放な性格だったため、官吏になる道は波乱に富み、開元26年頃、まずは嶺南に、数年後江寧の丞に、やがて龍標県（湖南省）の尉に左遷された。その辺の事情を、李白は次のように寄贈詩に書き残している。

「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」

楊花落盡子規啼 聞道龍標過五溪 我寄愁心與明月 隨風直到夜郎西

これは李白が、左遷されたと聞いた友人王昌齡への同情と悲しみを詠んだものである。

安史の乱のとき郷里に帰ったが、至徳2年（757年）頃、刺史の閻丘暁に憎まれて殺された。けれども悪には悪の報いがある道理の通り、その後、張鎬が河南の地に軍隊を勢ぞろいさせたとき、暁は期限に遅れた。鎬が殺そうとすると、暁は親が年老いており養う者がいないことを言い訳にして命乞いをした。鎬は「王昌齡の親は、いったい誰に養わせるつもりだったのか。」と叱りつけると暁はすっかり恥じ入ったという。

盛唐に生まれた王昌齡の生涯は決して官吏としての名声や政治的業績は際立たないが、この大時代と共に輝いたのは、この時代並びに後世において広く伝わらせしめた、その創作詩歌にある。

第二節 題材と内容

王昌齡の著作は詩集五卷（《全唐詩》は四卷に編集）、及び《詩格》・《詩中密旨》・《古樂府解題》各一卷、《鑒略》五篇があり、後者四つは今はもう伝わっていない。彼は生涯左遷されていたが詩名は大きく、文人の李白・王維・王之渙・高適・岑參・孟浩然・杜甫と交流があった。なかでも王之渙や辛漸との交わりが深く、彼らはいずれも王昌齡の詩を模範とした。

王昌齡は各種の詩体の中で七言絶句に最も優れ、構成が緻密で詩情が清らかであったので、「詩歌の天子王江寧」と称せられる。これは王昌齡が江寧県（江蘇省鎮江県）の長官であったことがあるためである。題材は多岐に渡り、内容が豊富である。友を送るもの、狩猟の様子、恨み、妓楼での生活、宮中の過去の事柄などがあるが、特に辺塞詩や閨怨詩、離別詩に名作が多い。

辺塞詩は将兵が辺境で報国する勇壮な精神と武を誇る様子を情緒的に描写し、また出征兵士の断ち難い望郷の念と別れの悲しみを表している。進取と残念の二種類の矛盾する気持ちを互いに溶け合わせて書いている。

婦人を題材とする詩は、江南の女性の無邪気で美しいこと、寢室の若い婦人の青春時代の幸福に対する憧れや期待、奥深い宮中の妃やそれに次ぐ者の、玉の階段や真珠の簾の陰での密やかな憂いや恨みを描いたもので、各種の人物はみな人を感動させる独特な芸術形像を備えている。特に高く評価されるべきは、男でもって女心を書いたことであるが、これらの女性ひとりひとりの微妙な感情の流れをしっかりと捉えている。ここには作者の豊かで深く広い同情の気持ちをはっきりと表れ、また詩人のうらやましく思う気持ちと、志が遂げられない憂鬱な心情とが溶け込んでもいる。

王昌齡の詩歌の題材と内容は、上記の辺塞・婦人の二種類が最も有名であるが、実は送別を書いた詩が最も多い。「送」「送別」「別」「留別」など、詩題自体に離別詩であることを示す作品は総作品の約4分の1を占めるが、その多くは後世の人にながらにされた。他の詩人たちの場合、王維は20%弱、李白はおよそ15%、杜甫・白居易は10%弱、韓愈も10%弱で、この分野に秀作を示さなかった杜甫や韓愈とはもちろんのこと、離別詩の代表的作者と言える李白や王維と比較しても、その比率は著しく高い。また、王昌齡の辺塞詩や閨怨詩はそれぞれ全体の約10%にすぎず、これと比較しても離別詩の比重が重いことがわかる。このことは彼の生涯において、実際に人との離別の機会が多かったことと決して無関係ではないだろう。

送別詩は巧みな表現の文章のスタイルで、思いは真実で言葉も良く、山や河が胸にあふれてくるという状況を読み手にもたらず。別れの際の無限の思いを描写し、余韻が嫋々と脳裏から消えない。彼の優れているところは異なる送別の感情を異なる文字を用いて、イメージをはっきりと表現できることにある。例えば、次の送別詩三首を例に挙げる。

「別陶副使归南海」	「送別魏二」	「送柴侍御」
南越归人梦海楼	醉别江楼橘柚香	沅水通流接武冈
广陵新月海亭秋	江风引雨入船凉	送君不觉有离伤
宝刀留赠长相忆	忆君遥在瀟湘月	青山一道同云雨
当取戈船万户侯	愁听清猿梦里长	明月何曾是两乡

面白いことに、彼の送別においては必ずと言って良いほど“月”を詠み、まるで“月”がなければ出発できないようだ。王昌齡は確かに月を利用して別れを詠む達人であると思う。なぜなら空の上の明月もまた、まるで人情を解し気持ちを表しているようで、同時に離別する人の心情が変化しているからだ。月にもしも本当に嫦娥がいたなら、きっと王昌齡を親友としたことだろう。

七言絶句の詩体は五言絶句に比べて句ごとに二文字多く、比較的深く掘り下げて変化に富んだ表現で思いを述べることができるが、同時に絶句特有のピントを合わせた洗練性、しかも豊かな想像空間をも持っている。王昌齡はこの形式詩を創作するのに、この種の詩歌の様式の特徴を十分にとらえ、その上豊かな心を内包した。他の五言絶句・五言七言古詩・五言律詩もどれも称賛するに足るものがあり、スタイルは奥深く優秀・勇壯・悲しみ・闊達・剛直・飄逸であるなどを備え、特定の形式にこだわらない。

王昌齡は詩を書くにあたって多くの七言絶句を書き、七言絶句を書くにあたって送別の情を多く書いたことから、小事にはこだわらないが、友情の二文字の上では非常に情緒のある人であるとわかる。その送別詩の代表作《芙蓉楼送辛渐》は王昌齡が江寧丞を務めていた頃の作である。

第二章 「芙蓉楼送辛渐」の検証

王昌齡の離別詩の代表作「芙蓉楼送辛渐」は、各種唐詩解説書にほとんど掲載されている。しかしながら、どれも語釈を中心として訳しているのが、特に第一句には解釈にいくつもの異同がある。そこで、語釈のみにこだわらず様々な観点からとらえ、どの解釈が一番適切かを立証していきたい。まずはこの詩が七言絶句であることを検証する。

第一節 近体詩の規則と平仄

「詩」には規則がいくつかあり、それによって古体詩か近体詩かを見極める。王昌齡が生きた唐代では近体詩も古体詩も作られていた。この詩も一見して七言絶句であると思われるが、「絶句」や「律詩」は規則に則って作られている近体詩であり、押韻の規則のみを満足させる詩は、五言古詩や七言古詩などの古体詩に分類される。従って、この詩が七言絶句であると言うためには、近体詩の規則に則って作られた詩であると言えなければならない。

1. 押 韻

偶数句末で韻を踏み、近体詩の場合は平声で押韻される。また、一句目も押韻が可能で、換韻を許さない一韻到底が原則。つまり仄声で押韻されているか、途中で韻を換えていたらその詩は近体詩ではなく古体詩である。ただし、古体詩は平声・仄声どちらでも韻を踏むので、平声押韻＝近体詩だと即断することはできない。

2. 二四不同二六対（二四六分明一三五不論）

これは一句内の二字目と四字目の平仄は逆に、二字目と六字目の平仄は同じにすること。 「芙蓉楼送辛渐」の詩で言えば、二字目の「雨」と六字目の「入」は同じ平仄に、四字目の「江」はこの二つとは異なる平仄になっていなければならない。

3. 反法・粘法

奇数句と偶数句の、平仄が反対になっていることを反法、ほぼ同じであることを粘法という。例えば平・平・仄・仄・平となっている句の次の句が仄・仄・平・平・仄であれば反法、平・平・仄・仄・平であれば粘法である。しかし実作品にはこのように全く同じもしくは逆といったものはほとんどなく、一・三・五字目で多少ずれたりする。

4. 下三連

近体詩における作詩上のタブーは二つあり、その一つが下三連である。これは句末の三文字が同じ平仄になることを指す。特に仄が三つ続く下三仄よりも、平が三つ続く下三平の方がより忌まれる。これはあくまで近体詩の句法における禁忌事項である。

5. 孤平・孤仄

仄・平・仄というように平声の一文字が仄声に挟まれる「孤平」(挟み平)や平・仄・平のように仄声の一文字が平声に挟まれる「孤仄」(挟み仄)を忌む。特に「孤平」が嫌われるのは、おそらく穏やかな音調を持つ平声が強い音調を持つ仄声に挟まれた場合、ただ一文字だけではうまく音を響かせることが難しく、印象も薄くなるという音調上の問題があるためであろう。

以上の条件をすべて満たした平仄式を作ると、五言詩の場合、平仄の「起こり」と「終わり」から分類して四つのパターンができる。「起こり」とは一句目が平と仄のどちらで始まっているかということである。二四六分明の条件から第一句二字目で判断する。「終わり」は一句目最後の文字で判断する。以下平声を○、仄声を●で表す。

A. 仄起こり平終わり型

まず一句目の二、四、五字目が確定する。(□●□○◎)。一字目は二字目と同じ平仄になるので、仄(●●□○◎)。三字目を平にすると下三連を犯すので、仄(●●●○◎)となり一句目が決定する。二句目は反法に従って平仄は逆に付ける(○○○●●)。偶数句末は押韻するので平声(○○○●◎)。下三字を見ると挟み仄を犯しているので、三字目は仄声にして(○○●●◎)二句目が決まる。二、三句は粘法で同じ平仄に並べる(○○●●◎)。三句目は韻を踏まないの五字目は仄声(○○●●●)。すると下三連を犯すので、三字目を平声に変える。(○○○●●)。四句目は反法で韻を踏む。(●●●○◎)よって、このパターンの平仄は次式となる。

A. ●●●○◎
○○●●◎
○○○●●
●●●○◎

同様にして残り三つのパターンを作ると、以下のようになる。

B. 仄起こり仄終わり型 C. 平起こり平終わり型 D. 平起こり仄終わり型

●●○○●	○○●●◎	○○○●●
○○●●◎	●●●○◎	●●●○◎
○○○●●	●●○○●	●●○○●
●●●○◎	○○●●◎	○○●●◎

これらは、五言四句の計20文字で数えると平声対仄声は10:10で同じ比率になっている。

第二節 「芙蓉楼送辛渐」の詩形式

七言「仄起り平終わり」式

寒雨連江夜入吳	○ ● ○ ○ ● ● ◎	● ● ○ ○ ● ● ◎
平明送客楚山孤	○ ○ ● ● ● ○ ◎	○ ○ ● ● ● ○ ◎
洛陽親友如相問	● ○ ○ ● ○ ○ ●	○ ○ ● ● ○ ○ ●
一片冰心在玉壺	● ● ○ ○ ● ● ◎	● ● ○ ○ ● ● ◎

二四六分明の条件より「起り」は第一句二字目で判断する。この詩は「雨」(yǔ)で「仄起り」。「吳」(wú)が平声で「孤」(gū)・「壺」(hú)と上平七の虞(yú)の韻を踏んでいる。平仄は「仄起り平終わり型」。七言の場合は上記五言のパターンの各句の上にそれぞれ二つずつ逆の平仄を付けるとよい。七言の「仄起り平終わり型」の基本パターンは上記右式となる。

これと照合すると、この詩は「寒」(hán)、「洛」(luò)、「親」(qīn)が基本パターンとはそれぞれ逆になっていることがわかる。

詩全体の平声と仄声の比率を同じにするために、「救拯法」が用いられる。「救拯法には一句内で相殺する方法と二句で相殺する方法とがあり、ここでは三句目の一字目「洛」(●)と三字目の「親」(○)が一句内で相殺している。一句目第一字の「寒」(○)は救拯策がとられていないが、一三五不論の条件で不問に付すと、全体の平仄の比率は15:13となり、基本パターンから一字のみ外れた近体詩形式の七言絶句作品になっていると言える。

第三章 初句解釈の異同

寒雨連江夜入吳	寒雨 江に連なって 夜 吳に入る
平明送客楚山孤	平明 客を送れば 楚山孤なり
洛陽親友如相問	洛陽の親友 如し相ひ問はば
一片冰心在玉壺	一片の冰心 玉壺に在りと

これは「芙蓉楼送辛渐／芙蓉楼にて辛渐を送る」の訓読書き下しである。この詩の後半の二句の解釈はどの注釈書も同じだが、第一句目「寒雨連江夜入吳」の「入吳」の訳には諸説がある。「入」の主体を何ととるかによって見解が分かれ、六説もある。いま、主体を「人間」とする三つの説は一つにまとめ、大きく四つに類別して検討を進める。

1. 王昌齡と辛漸が吳の地にやって来た(王のみ或いは辛漸のみも含む)(主体は「人間」)。
2. 吳の地方が夜になった(主体は「夜」)。
3. 寒雨が吳の地に降り始めた(主体は「寒雨」)。
4. 寒雨が長江に降り注ぎ、その江水が吳の地に流れ入った(主体は「長江」)。

第一節 「人間」を主体とする説

上記の訓読書き下し句を見た限りでは、何が呉に入ったのか判然としない。漢詩を、日本人が理解しやすいように書き下したはずの句が、いかに曖昧なものであるかがわかる。

それぞれの説を採る注釈書を順に挙げていくが、どれも既にこの詩について説明している先人の言葉をそのまま借りて、これが一番妥当であると断定していたり、語釈のみで判断していたりして、訳の論拠が薄弱である。そこで各説の場合の文法構造を分析して示し、またその時代状況からも考察して論拠を導き出すことにする。

【出自注釈書】

a, 王昌齡と辛漸を主語（主体）とするもの

- ・『唐詩選評釋』李攀龍編選 河洛圖書出版社印行

「連江之連含有兩義冒凄寒之夜雨以入吳蓋與辛並載而來此也」〈連江の連は寂しい夜の雨を冒して呉に入り、おそらく辛漸と供にここにやって来たという二つの意味を含む。〉

- ・『全唐絶句选釋』李長路 北京出版社

「前二句写寒江之夜、陪客入吳，明晨客去楚山孤。」〈前二句は寒い長江の夜、客の供をして呉に入り、明朝に客が去って楚山がぼつねんと残っている事を書いている。〉

- ・『王昌齡詩校注』李國勝校注 文史哲出版社印行（【注】より）

「鎮江古屬吳地、少伯與辛漸同舟渡江來此」〈鎮江は昔、呉の地に属しており、少伯（王昌齡）と辛漸は同じ舟で江を渡ってここに来た。〉

- ・『唐詩選詳説（下）』簡野道明著 明治書院（【通解】【余義】より）

「寒き雨の霏々として降るを冒して、夜、君と舟を同じくして呉の地に入ってきた。」

〈一説に、王昌齡はこのとき鎮江にいたので鎮江はすなわち呉であるから入呉とは言われぬ。思うに王昌齡は暫く他所に滞在して辛漸と共に舟を同じくして帰ったから入呉と言ったのであろう。連の字は辛漸と舟を同じくした意を含み、孤の字は辛漸と別れて後、己の孤寂となる意を含んでいる。〉

- ・『新装版 漢詩の世界 そのこころと味わい』石川忠久著 大修館書店

「寒々とした雨が川に雨脚を注ぐ中を我々二人は夜になって呉の国へ入ってきた。」

b, 王昌齡を主語（主体）とするもの

- ・『王昌齡詩注』李云逸注 上海古籍出版社（【評箋】より）

「唐汝詢曰：此亦被謫入吳，逢辛赴洛而有是叹也。」〈唐汝詢は言う。これも左遷されて呉に入り、洛陽へ赴く辛漸に出会ってこの慨嘆があったのだ。〉

- ・『唐詩選国字解3』服部南郭、日野龍夫校注 平凡社（【補説】より）

「“呉に入る”の主語を上のは寒雨とするか、作者とするかで解釈が分かれる。国字解が作者と

するのは、『唐詩訓解』に“我、方に雨を冒して夜行す”とあるによる。」

- ・『唐詩寶庫2 大唐詩天子 王昌齡詩選』呉彩娥編著 五南圖書出版有限公司

「詩寫冒雨入吳，平明送客，請朋友代轉親友，心已澄靜，不復熱衷官場：寒雨連江，我趕夜入吳來送別，…」〈詩は雨を冒して呉に入り、明朝に客を送り、友人に頼んで自分の代わりに親類や友に、心は既に澄んで静かであり、再び官界に夢中になることはないと伝えてほしいことを書いている。：寒雨は江に連なり、私は夜になって呉に入って送別をし、…〉

c, 辛漸を主語（主体）ととるもの

- ・『唐人七絶选』孙琴安 陕西人民出版社（【注释】より）

「指辛漸夜晚經過鎮江。因鎮江春秋肘属吳地。故云“入吳”。」〈辛漸が夜に鎮江を通ったことを指す。鎮江は春秋時代には呉の地に属していたので、故に“入吳”という。〉

- ・『中国古代名著今译丛书 唐詩三百首译析』李森 李星 吉林文史出版社（【注释】より）

「此句“入吳”，各家注解說法不一。是誰入？是辛漸，还是作者？有的注为辛漸，較确。此句是說辛漸在寒雨滿長江的晚上来到江寧」〈この句の“入吳”は各専門家で注釈の仕方がまちまちである。誰が呉に入ったのか？辛漸か、それとも作者か？辛漸とすると注釈が比較的確かである。この句は寒雨が長江に満ちた夜に、辛漸が江寧にやって来たことを言う。〉

- ・『唐詩三百首』邓紹基、史鉄良选注 大连出版社出版（【译】より）

「在秋雨滿江的夜晚你来到这吳地，清早为你送行楚地的山峦也显得孤独。」〈秋雨が江に満ちた夜に、あなたはこの呉の地にやって来た。早朝にあなたを見送る楚の地の連山もいかにも孤独に見える。〉

【文法構造と論拠—唐代の旅—】

寒雨 連 江 〔我們〕 夜 入 吳

S V O (S) (時間詞) V O

「連」のS（主語）＝寒雨、「入」のS＝我（們）という、二つの主体に二つの述語動詞のある動目構造句となる。“人物”は当然動詞の主体となり得る。ただ、「我們入吳」ならば何も問題ないが、「夜」の文字があるので、彼らの旅がどういうものだったかも考慮に入れなければならない。『校注 唐詩解釈辞典』（松浦友久編）には諸説の論拠がいくつか示されている。まず主体を王昌齡と辛漸とする理由の一つに、南京と鎮江の距離およそ80キロメートルは、当時の風習として送る者が一日の行程を共に旅するのに適当な距離であるということを挙げている（横山

伊勢雄『唐詩の鑑賞—珠玉の百首選』)。

そもそも送別場である芙蓉楼はどこにあったのか。『漢詩のことば』(向島成美著)、その他を見ても、芙蓉楼とは唐代に潤州の州治が置かれていた丹徒県、すなわち現在の江蘇省鎮江市の長江に臨む地に建つ楼であったとしている。これは唐の李吉甫の地理書『元和郡県図志』(巻二十五)江南道一、潤州の項に「其城吳初築也、晋王恭為刺史、改創西南楼名万歳楼、西北楼名芙蓉楼。」とあるによる。王昌齡が当時県丞を務めていた江寧は、今の南京市である。『中國歴史地圖集』を見てみると、江寧から鎮江までの距離は直線でも約70キロメートル。一日で歩くには少々長すぎる距離である。では、どうやって鎮江まで旅したのであろうか。

唐代の交通手段といえば、やはり徒歩での旅が主で、荷物の量や旅人の身分などによっては馬や牛、さらに船なども利用されている。この時代の中国は「道」という行政単位に大別され、その下は「州」、さらに下は「県」で構成された。隣接する州と州は街道や運河、河川により交通が確保され、さらに各々の州は管轄下の県へも街道で結ばれていた。唐代には全国的な交通網が整備されていたのである。よって徒歩で無理な距離ならば馬を使うことも考えられるが「南船北馬」の言葉にあるように、北を旅するには馬が、みなみは船旅が適している。河川・運河が多く、内陸水運が発達しているためである。

地図を見ると、江寧と鎮江は長江沿いの同岸にあり、しかも鎮江の方が下流にある。川沿いにある都市から都市へ移動する場合、誰しも水路に行くことを思いつく。ましてや内陸水運が発達していたのならばなおさらだ。それが上流への移動ならまだ陸路をとる可能性も残されるが、この場合は下りである。距離と時間と地形から考えて、船旅であった確率がかなり高い。

他の送別詩にも船で旅立つ人をうたう詩が多くある。その中の一つ、孟浩然の詩に次のようなものがある。

「送杜十四之江南」荆吳相接水爲郷 君去春江正淼茫 日暮孤舟何處泊 天涯一望斷人腸

この詩の第三句目を見ると、夜は運行せずに止まっていると解することができる。もちろんこの詩だけで、唐代は夜の舟の運行はなかったと断定するには弱い。しかし、当時の河川の状況を考えてみるとおのずと答えは見えてくる。

いくら水運が発達していたとはいっても、船も河の護岸も現在に比べれば不十分であっただろう。河の水量によっては減水を一月程待つ場合もあったという。しかも、王昌齡と辛漸が旅したその日は「寒雨」が降っていたのだから、当然長江は増水していることだろう。日本のように対岸にすぐ渡ることでできる小さな川でさえ増水した時は危険なのに、それと比較にならないくらい大きな大河川で、しかも危険度の増す夜に船を運行するだろうか。宿場がほとんどなくて、多少なりとも危険を冒してでも進まなければ泊まる場所がないというならまだしも、唐代は主街道沿いに「駅」や「館」という施設が設けられていた。駅は通信連絡機構であると同時にその従事

者むけの宿舎であり、館は州や県に設置され、官用で往来する行使宿舎として機能していた。駅に至っては路に沿っておよそ十五キロメートルに一駅があったという。宿場に関しては問題なさそうである。これならば宿場に泊まって朝を待つのが無難である。何もわざわざ増水した大河南で夜に船を漕ぐ必要はないだろう。

更に、送別の場では見送りの場所で宴会を開く習慣がある。酒を酌み交わしながらお互いの別れを惜しみ、旅立つ人を励まし、道中の無事を祈るためである。このような送別の宴を「祖餞」とも言う。「祖」は道中の安全を司る神、すなわち道祖神を指すことから、道祖神をまつる祭り、ひいては送別の意味に用いられる。「餞」は酒や料理を並べて旅人を送る宴会の意味で、「餞別」は本来お金と無関係の「酒宴を開いて別れる」ことを指した。夜になってから二人が着いたとすると、それから宴を開き、翌朝早くにはもう辛漸は旅だてに行くのだから、名残を惜しむ暇もなく、慌ただしい感じがある。そう考えると、夜には既に二人は芙蓉楼にいたと考える方が無難であるということになる。

また、『唐詩選評釋』は核心になる文字や言葉から解いていく説で、長江に「連なった」寒雨と二人で「連れだつて」呉へやって来たという、「連」の字を元に二者を重ねていく見解である。「連」の字が「連なる」「連れ立つ」という二つの意味を含んでいると付会して、呉に入った主体を王昌齡と辛漸に見立てている。しかし「連」は動詞では「連なる、接続する」、副詞では「続けざまに」、介詞では「～ごと、～を含め」という意味は持っているが（『中国語大辞典』角川書店）、「誰々と連れ立つ」という意味は持たない。さらに「寒雨連江」という文字面を見た限りでは「寒雨が江に連なる」とは読めても「王昌齡と辛漸が連れ立って」とは読み取れない。もしそういう意味を含むとしたら、後者の場合の主語も目的語も省略されていることになる。どちらか一方が省略されていることは有り得るが、両方は有り得ない。それはその動詞から想像し、勝手に前後を補ったに過ぎない訳となる。従って、「連」の字を拡大解釈して呉に入ったのが王昌齡達であると言うことはできない。

以上、呉に入った主体を王昌齡のみ、或いは辛漸のみとするのは当時の送別の風習から考えると、見送る者旅立つ者が共に旅してきたとするのが妥当であるから、不適切。二人が夜に呉に入ったとすると、鎮江までやって来たのは船旅であった可能性が高く、そうすると夜の舟の運行はなかったと考えられるので、これも不適切だと言える。よって、「人間」は「入呉」の主語（主体）にはなりえないと判断できる。

第二節 「夜」を主体とする説

【出自注釈書】

私が調べた中では見つからないが、『校注 唐詩解釈辞典』（松浦友久編）では、「夜」を主体と採るものに、『試析《芙蓉楼辛漸》』（李楊勇『語文教学与研究』1983年第5期）を挙げて

いる。但し、論拠は示されていない。

【文法構造と論拠—時間詞+動詞—】

寒雨 連 江 夜 入 呉
S V O S V O

「連」のS=寒雨、「入」のS=夜という、これも二つの動目構造句となる。但し、ここで問題となるのは“夜”という時間詞が動詞の主語となれるか否かである。そこで、「夜+動詞」となっている語を『大漢和辞典』で調べた。

- ・夜憶：夜、物思いにふける。
- ・夜歌：夜、歌う。
- ・夜帰：夜分に帰宅する。
- ・夜攻：夜間に敵を攻めること。
- ・夜行：夜歩く。夜、行くこと。

夜+動詞は、「夜が～する。」ではなく「夜に～する。」という、動作が行われる時間帯を示しているものであり、「夜」は決して動詞の主体とされてはいない。夜を主体とすることができるのは形容詞が続くときである。

- ・夜静：夜が静かである。
- ・夜浅：夜がまだ早い。
- ・夜冥：夜が薄暗い。
- ・夜闌：夜が更ける。
- ・夜涼：夜が涼しい。

唐詩の中で、他に「時間詞+動詞」の句になっているもので、時間詞が主体となっているものがあるかを見してみる。

- ・「集靈臺」（張祜） 虢國婦人承主恩 平明騎馬入金門…（時間詞）VOVO

平明=明け方は馬に乗ることはできない。これは虢國婦人のことを歌っているものであるから、「騎」の主語は虢國婦人。金門=宮廷の門に入ったのも、馬に乗った虢國婦人である。よって、「平明」は二つの動詞「騎」と「入」どちらの主語でもない。

- ・「帝京篇」（駱賓王） …王侯貴人多近臣 朝遊北里暮南鄰…（時間詞）VO（時間詞）O

暮れと南鄰のあいだに“遊”が省略されていると考えて、北里・南鄰は遊ぶ場所を表す語。“遊ぶ”のは朝や暮ではなく前の句の王侯貴人とするのが妥当。

- ・「春夜別友人」（陳子昂） （時間詞）VO

これは詩の題名だが、春の夜が友人と別れたのではなく、友と別れたのは作者。「春夜」はや

は「別」の主体ではない。

また、「芙蓉楼送辛漸」の第二句を見ても同じことが言える。「平明送客楚山孤」の「平明」は明け方の意。つまり、時間詞である。この「平明」を「送」の主体として訳しているものは一つもない。どれを見ても「明け方に旅立つ君を見送れば……」と、見送った時間帯を表す語としてとられている。もし「夜」が主体となれるなら、「平明」も「送」の主体となりうる。同じ詩の中でなぜ「夜」の方だけ主体としようとしたのかは分からないが、平明=明け方に客=辛漸を送ったのは「我」=王昌齡であることは題から推しても明白で、「明け方」が辛漸を見送ったわけではない。従って、ここでも時間詞は動詞の主体となっていない。

以上より、「夜」(時間詞)が主体となることができるのは形容詞述語文(S-AjP)のときであり、動詞の主体語として使われている例はないことがわかった。ただ「夜になる」という意味で「入夜」という言葉はある。例えば杜甫の、「春雨喜雨」詩には「隨風潜入夜，潤物細無聲」とある。夜を主体とする説は「夜入吳」を「吳の地方が夜になる。」としているが、夜入～(地名)で「夜になる」と訳せる言葉はない。「夜+動詞」の場合の「夜」は、あくまでも時間の概念を表す言葉として用いられているにすぎない。よって、「夜」は「入」の主体とはなり得ないと言える。

第三節 「寒雨」を主体とする説

【出自注釈書】

・『唐詩三百首新注』金性堯注 上海古籍出版社

「詩中の「入吳」，各本説法不一。究竟入吳的是誰、辛漸？ 作者？ 還是主客兩人？《中國歷代詩歌選》解爲寒雨，最穩，即假定在寒雨連江前兩人已在潤州。」〈詩中の「入吳」は各本で見解がまちまちである。結局吳に入ったのは誰なのか。辛漸か？ 作者か？ それとも主客の二人か？『中国歴代詩歌選』は寒雨と解しており、最も確かである。すなわち寒雨が江に連なる前に二人は既に潤州に入っているとしている。〉

・『全唐詩精華分類賞集成』潘百齊編著 河海大学出版社

「夜入吳：指寒雨入吳。」〈夜入吳：寒雨が吳に入ることを示す。〉

・『唐詩賞辭典』蕭滌非、程千帆等撰 上海辞书出版社出版

「“連”字和“入”字写出雨势的平穩連綿，…他只是將听觉視覺和想象概括成連江入吳的雨势，…」〈“連”の字と“入”の字は雨の勢いが穏やかで長く続いていることを描写し、…それはただ聴覚と視覚と想像で、江に連なって吳の地に入った雨の勢いを概括して……〉

・『唐詩の風土』植木久行著 研文出版

「冷たい雨がしきりに川面に降り注ぎ、夜、この吳の地も雨につつまれた。」

- ・『唐詩散策』目加田誠著 時事通信社

「冷たい雨が江上に降り注いで、夜になって呉の地も雨になった。」

【文法構造と論拠—連動式—】

寒雨 連 江 夜 入 呉
S V O (時間詞) V O

二つの動詞「連」と「入」の主語を「寒雨」とみなす連動式の構造になる。

連動式とは、二つ以上（よく見られるのは二つ）の動詞を連用し、それらが一つの主体の一貫した動作・行為として主語に続く文のことで、この場合の動詞は決して同格の事柄ではなく、後ろの動詞が前の動詞の意味を補足しているものである。従って、前の動詞をもって主要部分とし、後ろの動詞を副次的な部分とする。現代漢語で言えば、これには数種類のタイプがある。

(『中日辞典』小学館より)

- 動詞1（前の動詞）が動詞2（後ろの動詞）の表す動作・行為の方式や状況を表すもの。
ex) 他们争着发言
- 動詞2が動詞1の表す動作・行為の目的を表すもの。
ex) 去机场接朋友
- 動作・行為の前後関係〔動詞1→動詞2〕を表すもの。
ex) 我跳到黄河里去洗一个澡
- 動作・行為の因果関係〔原因→結果〕を表すもの。
ex) 我有事没能参加
- 肯定表現の後に同義の否定表現を置き補充するもの。
ex) 他紧握战友的手不放
- 動詞1に“有”“没有”“无”が来るもの（後置修飾のようになる）。
ex) 他没有资格入工会

唐詩の中で連動式が使われている句例には以下のようなものがある。

- ・「龍池篇」(沈佺期) …池開天漢分黃道 龍向天門入紫微…SVOVO
- ・「奉和初春幸太平公主南莊應制」(李嶷) …流風入座飄歌扇 瀑水當階濺舞衣…SVOVO
- ・「返照」(杜甫) …返照入江翻石壁 歸雲擁樹失山村…SVOVO

「龍池篇」の場合は「向」と「入」の二つの動詞の主語が「龍」となる。「天門」を「入」の主語ととると、後に説明する兼語式になるが、そうすると「紫微」は宮殿のことなので「天門が宮殿に入る」という意味になり、不適切。題意からしても「龍」を主語とする連動式とみる。こ

れは天門に向かって宮殿に入るという前後関係を表しているのでcのタイプである。次の李邕の詩は風が宴の場に入って扇を飄すとうたっている。これも前後関係よりcのタイプとなる。杜甫の詩の「返照」とは夕陽の照り返し、つまり光である。「光」が「入」と「翻」の主語となり、これもやはりcのタイプである。このように唐代の詩では連動式も使われていたことがわかるので、王昌齡のこの詩も連動式となっている可能性は高い。

ここで、考えるべきは「雨」が動詞の主体となれるか否かである。雨は自然のもので、生き物ではない。人間、動物などが主体となっている詩は数多くあるが、同じくらいに風や光など自然のものが主体となる詩も多い。上の詩では「流風」「返照」が主体となっている。唐詩の中で他にも「入」の字の主体として使われているものは数多い。

- | | | | |
|------|--------------|------|-------------------|
| * 香 | ・「西掖省卽事」(岑參) | * 季節 | ・「次北固山下」(王灣) |
| | …千門柳色連青瑣 | | …海日生殘夜 |
| | 三殿花香入紫微… | | 江春入舊年… |
| * 音 | ・「中年」(鄭谷) | * 道 | ・「晚次樂卿縣」(陳子昂) |
| | …苔色滿牆思故第 | | …川原迷舊國 |
| | 雨聲入夜憶春田… | | 道路入邊城… |
| * 日 | ・「宴南亭」(王昌齡) | * 山川 | ・「己亥歲」(曹松) |
| | …酣竟日入山 | | 澤國江山入戰圖 |
| | 暝來云歸穴… | | 生民何計樂樵蘇… |
| * 花 | ・「青樓怨」(王昌齡) | * 煙 | ・「寒食」(韓翃) |
| | 香帟風動花入樓 | | …日暮漢宮傳蠟燭 |
| | 高調鳴箏緩夜愁… | | 青烟散入五侯家 |
| * 平野 | ・「登兗州地樓」(杜甫) | * 氣 | ・「奉和春日出苑矚目應令」(賈曾) |
| | …浮雲連海岱 | | …渭水晴光搖草樹 |
| | 平野入青徐… | | 終南佳氣入樓臺… |

これらはほんの一例に過ぎず、人物を主体とする詩に劣らずたくさんある。これを見ると自然物が主体となることができるといことがわかり、当然「雨」も例外ではない。これで寒雨は動詞の主体となれることがわかったが、「入」の主体であると言うには“寒雨連江夜入吳”が連動文構造と言えなければならない。

連動文は上述の通り、一つの主体の一貫した動作・行為であることから、その動作・行為は相互に関係し合っている。そこで、「連」と「入」の関連性をタイプ別に見ていく。

aは「連」が「入」の方式や状況を表していることになるので、「寒雨が江に連なりながら呉に入っていく」と取れる。“雨が江に連なる”とは雨と江の境がはっきりしない様子を言い、

江に降りしきる雨が呉の地方にも降り始めたという意になる。bは「入」が「連」の目的を表すということだが、これでは「呉に入るために江に連なる」という意味になり、妥当ではない。cは前後関係を表し、「江に連なってから呉に入った」となる。これは“江に連なる”→“呉に入る”に一連の関連性があるか否かが問われる。呉に入るとはすなわち呉の地方に雨が降り始めることであり、江に連ならなくては呉に雨が降り始めないということはない。江と連なったのは呉に入る前で、後に普通に呉に雨が降ったとも取れなくはないが、そうすると雨の動きに関連性がない。dの因果関係で言うと、最初の動詞の「連」が原因で「入」が結果となるので「寒雨が江に連なったので呉に雨が降った」という意味になり、cと同様の理由で妥当ではない。eとfについては否定表現もないし、後置装飾もないので該当しない。連動式のタイプで該当するのはaであり、文法的にも問題はない。

主体を寒雨とするときに考えなければならないのは『全唐詩』の「芙蓉楼送辛漸」の詩である。これには“寒雨連江夜入呉”が“寒雨連天夜入湖”と記されている。吉川幸次郎氏は『王昌齡詩・芙蓉楼に辛漸を送る』で、呉(wú)と湖(hú)の音が近いことによる誤りと認められるが、仮にそう読めば主格は「寒雨」となる。ということは本来「入呉」の主格は人ではなく「寒雨」と読まれていたからこそ、こうした誤本の発生する余地があった、とする。

『全唐詩』の場合で考えると、「入湖」の主格は寒雨以外有り得ない。芙蓉楼のある呉の地方には二人が着いたときまだ雨は降っていなかったが、夜になって降り始めた。暗いので目には見えないが、湖に降る雨の音で分かる、と解釈すると、「夜」もきちんと生かされる。ただ、「天」よりも「江」の方が流れがあるので、上流から下流へ場所が移ったという動きが感じられ、「湖」より「呉」の方が範囲が広いので視野が広がる。スケールの大きさから見て“寒雨連江夜入呉”を支持するが、明らかに主体を寒雨としか取りようのない「連天」「入湖」という語にしているものもあるという点から見ても、「寒雨」は「入呉」の主体と成るにふさわしい。

第四節 「江」を主体とする説

【出自注釈書】

・『唐詩鑑賞辞典』前野直彬編 東京堂出版 「入呉：雨で増水した長江が呉に流れ込む。」

【文法構造と論拠一兼語式一】

寒雨 連 江 夜 入 呉
 S V O/S (時間詞) V O

二つの動目構造句であるが、前の動詞「連」の目的語である「江」が後の動詞「入」の主語と

なる兼語式の構造となる。

兼語式とは、同じ一つの名詞が二つの役割を兼ね、前の動詞の目的語であると同時に後の動詞の表す動作・行為の主語にもなる。(ex. 我请他吃饭：私は彼を食事に招待する。) 現代漢語の兼語式のタイプには以下のようなものがある。(『中日辞典』小学館より)

- ・動詞1 (前の動詞) が使役の意味を持つもの
例えば請, 叫, 使, 送, 选, 派遣, 催促, 要求など
- ・動詞1 が愛憎・好悪を表すもの
例えば愛, 恨, 怪, 骂, 喜欢, 感謝など
- ・動詞1 が“有”“没有”であるもの (いわゆる「存現文」)
同様に出現や消失を表す“生”“来”“死”がくこともある。

唐詩で兼語式が使われている例は次のようなものがある。

- ・「閑情」(孟遲) …藤蕪亦是王孫草 莫送春香入客衣 V O / S V O

春の香を送っているのは前の句の王孫草である。王孫草が春の香を送って客衣に入る、つまり香をしみ付かせることのないように、とうたっている。上で述べたように、「送」は使役の意味を含んでいるので兼語式として訳すことに不都合はない。

『校注唐詩解釈辞典』の中でこの兼語式を使った詩という説を支持する論拠として、吉川幸次郎氏の「王昌齡詩・芙蓉楼に辛漸を送る」を挙げている。しかし、それは他の説を否定もしくは疑問視しているだけに過ぎず、「江」を主体と断定する論拠と言うには弱い。「江」が「入」の主体であるというには“寒雨連江夜入吳”が兼語式構造句であること、「江」があとの動詞の主体となることが言えればよい。

まず兼語式と言うには動詞1、すなわち「連」が上で述べたような条件を満たしている必要がある。第一節でも少し触れたが、連の字には使役の意味は含まれない。愛憎や好悪を表しているわけでも、出現や消失を表しているわけでもない。これは現代漢語文法から照らし合わせているわけだが、『漢語語法史』の兼語式の発展の章を見ても、上古時代から「有」字的賓語、常常兼作主語。這種“有”字句一直沿用到現代。」とある。また、兼語式として用いられた動詞の例は命、使、遣、呼などの命令や願望を表すもの、留、邀などの招待することを表すものなどが挙げられており、現代漢語辞典で調べた例と大差ないことがわかる。ここで特筆すべきは「先秦から現代まで二千余年来、兼任する代詞が“之”から“其”に変わったほかは、最も安定した構造形式である。五四運動以後に新たな発展があったとは言っても動詞の多様化に過ぎず、その構造形式は依然として三千年前と同じである」ということだ。文法は変化しにくいものなのである。

兼語式として用いられる動詞の根本的な種類がほとんど変化していないのに、そのうちのどの意味合いも含まない「連」の字がこの場面でだけ兼語式で使われることはない。よってこの句は兼語式ではない。とすると、「江」は「入」の主体ではないということになるが、一応「江」が

動詞の主体となれるかもしれないので検証してみる。

兼語式の場合は寒雨が江に連なって、その江水が夜に呉の地に流れ入ったと訳される。では「江」が動詞の主体となり得るか否かだが、陳子昂の「峴山懷古」という詩を見ると、

…城邑搖分楚 山川半入呉…

とあり、「山や川が半ば呉に入る」としている。川が呉に入ると言えるのならば、江も同様であると考えられる。これを見る限り、江を「入呉」の主体ととれなくはない。ただ、この詩の「入呉」と「寒雨連江夜入呉」の「入呉」の主体とを考えると、気にかかるのが「夜」の文字である。「峴山懷古」にはそのような時間の限定はない。だから「入呉」の主体も山川で問題はない。自然のものが主体となれることは第三節で述べた通りである。では「“夜”に江が呉に入る」とはどういうことか。川というものは常に流れているものであり、絶え間なく呉に流れ込んでいくはずなので、目の前の情景である川の流れを「夜に呉に入ってきた」と限定して描写するのは合点がゆかない。第三節で自然物が主体となっている詩をいくつか挙げたが、それらはどれも、時間に関係なく実際に目に見える情景をうたったものである。よって、江を主体ととれそうではあるが、「夜」の文字があることにより情景的に不自然で、従って江は「入」の主体ではない。

結 論

これまでのことを総合すると、「寒雨連江夜入呉」の「入呉」の主体は「寒雨」であるという結論に達した。主体が「王昌齡と辛漸」では当時の旅の在り方から考えて状況的に無理がある。「王昌齡」のみ或いは「辛漸」のみとする場合も同様である。「夜」はそもそも動詞の主語にはなれない。「江」は「夜」の文字があるために目の前の情景としては不自然さがある。「寒雨」を主語とすることが文法的にも情景的にも最も問題がない。それにしても、なぜこれほど何通りもの通釈が生じてしまうのか。それは王昌齡の詩の特徴に一原因が隠されているようだ。王昌齡と同じく七言絶句の名手とうたわれた李白の作品と比べてみよう。

【李白詩との比較による検証】

王昌齡の七言絶句は五言絶句・五言古詩・五言、七言律詩に比べて比較的多く、題材中、辺塞・婦人・送別の多くはこの形式をもっていた。王昌齡が七言絶句に長けているのは李白と似ており、そのうえ彼の七言絶句の水準も李白と比べて大差ない。王昌齡・李白二人の絶句は盛唐随一と言われ、唐代から宋・元・明・清に至るまで、肩を並べるに足る者は2、3人に過ぎなかった。二人は同様に小事にこだわらず、同様に気質が鷹揚であった。王昌齡と李白の七言絶句は達成度においては匹敵しているが、各自の特色ははっきりしており、色調は大差ないが混合してはいない。

《李白》超逸。「詩仙」と称され七言絶句以外において全てに通じており、古体詩・歌の業績も大きい。李白の七言絶句は自然で素晴らしく、あたかも気の向くままに書いているようであるが、裏面の技量はかえって大きい。自由奔放で率直なことが特徴である。また、明るい輝きを帯

び、流動の感覚に富むものが多い。行旅・離別・飲酒・月光などが代表的な題材として挙げられる。李白の率直的な表現は、読み手を惑わせることがない。情景を率直にうたう天才的な詩人である。

《王昌齡》優婉。王昌齡の詩風はきれいで美しく、風格は雄壮で堅苦しさが無い。王昌齡の意境は全て七言絶句において発揮されており、別の詩体も良い作品はあるが、他に及ぼした影響は彼の七言絶句の大きさにはとても及ばない。王昌齡の七言絶句は推敲に推敲を重ねたところが絶妙で、叙情の味わいが濃厚であるが、その清新さ明快さを損なわない。短い詩篇の中で簡潔なイメージの言葉でもって叙事、情景の描写、叙情を入りまじらせた。例えば彼の《出塞二首》、《芙蓉楼送辛渐》、《从军行》等、みな人々によく知られており、ほとんど誰でも知っている。それらの伝播の広く遠いことは李白の七言絶句の名作とほとんど上下がないのである。

似た様な題材を用いて作られた二人の詩を以下にそれぞれ挙げる。まずは遠くにいる夫や恋人を想う女性の嘆きを題材とした歌から比較してみる。

・「烏夜啼」(李白)

黄雲城邊烏欲棲
歸飛啞啞枝上啼
機中織錦秦川女
碧紗如煙隔窓語
停梭悵然憶遠人
獨宿空房淚如雨

・「閨怨」(王昌齡)

閨中少婦不知愁
春日凝粧上翠樓
忽見陌頭楊柳色
悔教夫婿覓封侯

李白の「烏夜啼」は1、2句で烏が巢に帰ってくることを詠んでいるが、これは烏さえも帰ってくるのに夫はまだ帰ってこないという、妻の想いの伏線と感じさせる。第三句の秦川の女とは『晋書』列女伝に見える竇滔の妻蘇蕙のこと。後半四句を見ると「憶遠人」や「涙如雨」など一人寂しげな女性の姿がすぐに目に浮かぶ。しかし、王昌齡の「閨怨」は、題からして「閨怨」となっているにもかかわらず、第三句まで読んでも閨怨詩という感じがしない。「不知愁」とははっきり書き、厚化粧などして寂しげな様子は見えない。第四句目になって初めて、手柄をたててくださいと気軽に送り出してしまったから一人で寂しく待たねばならなくなった、と後悔の色を見せている。その気持ちの移り変わりが若妻の愁いを知った嘆きをよく伝えている。

次は宮女のせつない怨みの歌をみる。

・「怨情」(李白)

美人捲珠簾
深坐顰蛾眉
但見淚痕濕
不知心恨誰

・「西宮春怨」(王昌齡)

西宮夜靜百花香
欲捲珠簾春恨長
斜抱雲和深見月
朦朧樹色隱昭陽

これはどちらも「怨み」というか「寵」を失った「嘆き」がすぐに見て取れる。ただ李白の方は「顰蛾眉」「涙痕濕」と女性の愁いの表情が良く分かるが、王昌齡の方は「春恨」とは言ってもその表情を描写しているわけではない。物を抱き抱えるという動作は、物思いにふけるときや寂しいときなどに無意識に行うという印象が強い。琵琶を胸に抱き抱えてじっと月を見つめるという行為によって、女性の物思いの様子を表している。

最後に古跡を訪れ昔を偲んで作った詩を見てみる。

・「越中覽古」(李白)

越王勾踐破吳歸
義士還家盡錦衣
宮女如花滿春殿
只今惟有鷓鴣飛

・「梁苑」(王昌齡)

梁園秋竹古時烟
城外風悲欲暮天
萬乘旌旗何處在
平臺賓客有誰憐

どちらも昔の栄華と荒廃した現状とを比較していることはわかる。李白の方は前三句が越王勾踐が呉を打ち破って凱旋したときの回想で、第四句だけが今見える情景をうたっている。華やかさと寂しさの対比で、懐古の情がよく見て取れる。王昌齡の方も現在の荒れ果てた様子から、当時を回想している点は李白と変わらない。ただ、こちらは華やかな描写は少なく、寂寥感の方が強い。その中で、賓客として自分を登場させて、古跡を見ての懐古というよりも、むしろ自分を見てくれるものが誰もいないという嘆きが込められている。左遷ばかりで不遇であった作者が、昔の栄華など見る影もない古跡で自分の境遇も引き合いに出しているのも、その古跡の寂しさとやるせなさが引き立つ。

上記の三種類の詩を見ても、すぐにテーマがそれとわかるのはどれも李白の詩である。もちろん、この三首ずつの詩だけで李白の詩は率直で、王昌齡の詩は婉曲的と結論づけられるわけではない。しかし、こういう種類の詩がそれぞれに多いこともまた否めないだろう。またどちらがどう良いかなども一概に言えるものではない。李白の詩の細やかな描写は読み手の想像を助け、自然に共感を呼ぶ。一方、王昌齡の詩は柔らかく遠回しな言葉でもって表しているのも、読み手の想像を豊かにする。つまり巧みにひねっているから、その言葉からそれが意味する心理を見付け出さなければならない。これが良く表れているのが「芙蓉楼送辛漸」の第四句目である。

「芙蓉楼送辛漸」の後半第四句の“一片冰心在玉壺”の比喩は基づくところがある。六朝宋の詩人、鮑照(414?~466)の樂府詩「白頭吟」の冒頭の句がそれである。

直如朱糸繩 清如玉壺氷(『鮑氏集』卷三)

この二句では一人の女性が瑟に張られた赤い糸の絃の如くに真直ぐで、白玉の壺に収められた氷の如くに清らかな心を保ち続けたとうたわれている。ここで“玉壺の氷”は明らかに心の清らかさを比喩するものとして提示されている。左遷されている身でありながら、現状を嘆くわけでも自分の近況を報告しているわけでもない。だが、心は清廉潔白で一点の曇りもないと返して

いることから、清らかで強靱な孤高の精神を持った人物であると連想できる。上詩で見た通り、李白の詩を見るとすぐ気付くのだが、例えば望郷の念を詠んだものでは「思故郷」というふう言葉で単刀直入に書き表している。仮に李白にこの玉壺句を作らせたとすれば、第四句目は確実に違う体裁のものとなっていたはずである。「官吏に心残りはない」とか「元気であるから心配するな」などという直截な言葉を残したことだろう。だが王昌齡の場合は、言葉の裏に思いが隠されている。一見しただけでは何を言いたいのかわからない。清らかな氷が一つ、白玉の壺にあると言われても前出の鮑照の「白頭吟」を知らなければ、第三句までとのつながりが見当もつかない。しかし、これが心の清らかさを表す比喩だと知り、当時作者が左遷されていた身であったことを理解すれば、いかに自分の澄みきった心境をこのうえなくよく表しているかがわかる。この婉曲的な表現こそが、李白と決定的に異なるところである。これがあるからこそ余韻が尽きることがなく、王昌齡があつた「詩仙」と称される李白と肩を並べる七言絶句の名手と言われる所以なのである。

王昌齡は推敲に推敲を重ねているから、読む側としてはすんなり作者の意図を読み取ることが難しい。その上、我々が詩を読む場合、「鑑賞」するのが常であるから読み手によって味わいが異なるのも当然である。胸の内では想像を膨らませるということは、その人の先入観や価値観やイメージが先行するため、それこそ千差万別の味わい方ができる。だから「芙蓉楼送辛漸」のように、特に婉曲的な表現で書かれた詩は、人によって解釈の仕方が異なるという状況が生じる。しかし、作者が意図するところのものが幾通りもあるはずはない。語釈だけでわからなければその時の状況から、状況で判断がつかなければ文法から、或いは総合して考えてみる。一つの見方に固執せずに、常に様々な視点から詩を読み解いていけば、100%とはいかないまでも、それに近い解釈をすることは可能であると考ええる。

[監修者あとがき]

卒論の口頭試問の際、梶原嬢に次のように賛辞を述べた。

「従来、日本や中国の文人が唐詩を解釈し鑑賞するに当たって、とかく‘語釈’と‘時代状況の分析’のみに頼った結果、多くの作品の通釈に少なからぬ異同の説を生ぜしめ、且つその解決策を見出せないまま今日に至った嫌いがある。梶原さんの研究は、その渦中へ一石を投じ、唐詩読解法に‘平仄’と‘語法’の観点を加味することにより正解を導き出そうとする画期的手法を提起し実践したものである。労作を多とすると共に、今後の更なる精進を期待したい。」

その後、何らかの形でこの出色の卒論を紹介したいと願っていたが、このたび本論輯でその機会を得た。漢詩文読解法の新機軸を提案するものとして広く江湖に問いたいと思う。

(2002. 1. 15記)

参考文献

- * 『唐詩鑑賞辞典』 萧涤非 程千帆等撰写・上海辞书出版社出版
- * 『唐詩選評釋』 李攀龍編選・河洛圖書出版社印行
- * 『王昌齡詩注』 李云逸注・上海古籍出版社
- * 『唐詩三百首新注』 金性堯注・上海古籍出版社
- * 『唐詩三百首詳析』 喻守真編註・中華書局出版
- * 『全唐絕句选釋』 李長路・北京出版社
- * 『王昌齡詩校注』 李國勝校注・文史哲出版社印行
- * 『唐人七絕选』 孙琴安・陕西人民出版社
- * 『中国古代名著今译丛书 唐詩三百首译析』 李森・李星 吉林文史出版社
- * 『王昌齡詩集』 朋友書店
- * 『唐詩字詞大辞典』 孙寿玮編・华齡出版社
- * 『唐詩三百首』 邓紹基、史鉄良选注 大连出版社出版
- * 『百卷本中国全史 中国隋唐五代文学史』 史仲文 胡晓林主編・人民出版社
- * 『漢語語法史』 王力著・商務印書館
- * 『現代漢語句型』 李临定著・商务印书館
- * 『全唐詩精华分类鑑賞集成』 潘百齐編著・河海大学出版社
- * 『唐詩寶庫 2 大唐詩天子 王昌齡詩選』 吳彩娥編著・五南圖書出版有限公司
- * 『中國歷史地圖集 第五冊 隋唐五代十國時期』 譚其驥主編・三聯書店有限公司
- * 『中国歴史文化事典』 孟慶遠主編・小島晋治 立間祥介他訳・新潮社
- * 『唐詩選国字解 3』 服部南郭 日野龍夫校注・平凡社
- * 『唐詩の解説と鑑賞』 内田泉之助・明治書院
- * 『中国語常用動詞例解辞典』 荒屋勸主編・日外アソシエーツ
- * 『唐詩及唐詩人』 小杉放庵著・書物展望社
- * 『唐代の詩人—その傳記』 小川環樹編・大修館書店
- * 『新釈漢文大系19 唐詩選』 目加田誠著・明治書院
- * 『新訂 中国古典選16 三体詩 上』 村上哲見 吉川幸次郎監修・朝日新聞社
- * 『大漢和辞典 修訂版』 諸橋轍次著・大修館書店
- * 『唐詩鑑賞辞典』 前野直彬編・東京堂出版
- * 『漢詩漢文名言辞典』 鈴木修次編著・東京書籍
- * 『校注 唐詩解釈辞典』 松浦友久編著・大修館書店
- * 『中国人の生活と文化』 朱惠良著・筒井茂徳 蔡敦達訳・二玄社

- * 『中国漢詩 心の旅2 惜別の詩』井上端監修・田川純三執筆・世界文化社
- * 『詩語の諸相－唐詩ノート－』松浦友久著・研文出版
- * 『長江漢詩紀行』渡辺英喜著・昭和堂
- * 『唐詩選詳説』簡野道明著・明治書院
- * 『中国語大辞典 上』大東文化大学中国語大辞典編纂室編・角川書店
- * 『新装版 漢詩の世界 そのころと味わい』石川忠久著・大修館書店
- * 『中国の名詩鑑賞5 〈盛唐〉』内田泉之助監修・中島敏夫編・明治書院
- * 『漢詩のことば』向島成美著・大修館書店
- * 『漢詩の風土』植木久行著・研文出版
- * 『唐詩散策』目加田誠著・時事通信社
- * 『中国の詩情 漢詩をよむ楽しみ』佐藤保著・日本放送出版協会
- * 『第二次中国都城制研究学術友好訪中団記録 中国江南の都城遺跡－日本都城制の源流を探る－』
岸俊男編・同朋舎出版
- * 『新訂 中国古典選14 唐詩選 上』高木正一著・朝日新聞社
- * 『新訂 中国古典選15 唐詩選 下』高木正一著・朝日新聞社
- * 『李白研究－抒情の構造－』松浦友久著・三省堂
- * 『唐詩の解釈と鑑賞&平仄式と対句法』松尾善弘著・文芸社1993